

やってる。

「ゴジラの鉛筆けずりじゃん。ふうん、口に鉛筆を突っ込むのかあ。おもしろえ、これ、ちょっと貸してくれよ」

「あ、それは……、あの……、だめ……」

それ以上、何も言えなかった。光希の「貸せ」は「くれ」と同じだ。ちえっ、持ってくるんじゃないかった。帰りの会までずっといやな気分。早く下校にならないかな…。

「さよなら〜!」

朝の挨拶の三倍くらい元気な帰りの挨拶。教室中の椅子がいっせいにガタガタッと鳴って、みんながドドッと廊下へ出て行く。風呂のお湯が一気に排水溝に吸いこまれるみたいだ。ぼくはたいてい、そのあとからゆっくりと教室を出るんだ。けれど昇降口で靴を履き替えると、一気に世界が変わる。

「よっしゃ、今日もがんばるか!」

ぼくの一日は、ここから始まる。軽く鼻歌を歌いながらいつもの通学路を歩いていると、「バシン」と音がして、突然、ぼくの帽子が空を舞った。

「じゃあね〜!」

これまた同じクラスの理子グループだ。ぼくより先に昇降口を出たはずなのに、なんで後ろから来るんだ。それに何もいきなり人の後頭部を張り倒さなくてもいいだろう。いてえなあ。おまけに三人そろって大口開けて笑いやがっ

て。くそっ、今に見てる! ぼくは裏返しに着地した帽子を拾い上げ、思い切り深くかぶり直した。

「ただいま。おやつ、いらなから!」

毎日、同じセリフ。バタバタと階段を駆け上がり、自分の部屋へ向かう。勢いよくドアを開けて元気な挨拶。

「ただいま!」

ぼくの部屋は四畳半。置いてあるのは勉強机と本棚。けれどその本棚の半分は、本以外のものが支配している。それは、「ゴジラのフィギュア」だ。大小取り混ぜて三十体以上ある。そう、ぼくはゴジラフリーク。……なんて言うてるけど、実際にゴジラの映画を映画館で観たことはない。最後のゴジラ映画が上映されたのは、ぼくがまだ赤ん坊のころだったからね。けれど二年生の夏、お父さんが借りてきたゴジラのDVDをたまたま観た。かっこよかった。すごい迫力だった。胸がドキドキした。その時からなんだ。ぼくの頭の中にゴジラが住み着いてしまったのは。

「今日は、ビルを作るかな。外灯も二、三本作るか」

そんなひとりごとを言って、グイッと腕まくりをする。

そう。ぼくは今、「ジオラマ」を製作中なんだ。それも四畳半いっぱいなの、でかきMAXジオラマをね。何のジオラマかって? それは街。ぼくの住んでるこの街さ。もう三分の一くらいはできあがってる。今日のビルは、バルサ材